里見八犬傳 第八輯 巻八

へ13
709
46

遠門
3
號 704
巻 46

明治三六年
十月九日
購求

南總里見八犬傳第八輯巻之七

東都　曲亭主人編次

第八十回

天機を談〳〵老獸舊洞を惜む
蕉火を照して勇僧猯穴に入る

再説那癖者們は種平嶋平が擊出せる鐵炮の响と俱に頭領とおぼしき船に乘る一人の矢庭に數丸を仕掛て這它三個の癖者は吐嗟とおどろき駭慌て頭領を掖起まるまゝ然うは船を倒まじと扶けて引抗んとせし程に連放被ける鐵炮に又一人は擊仆されて一箇の丸は那頭領の胃間を再擊て碎く勢ひ猶激しくもあるかな殘る兩個の癖者は戸艪を捨て俟うち捨て往方も知ず逃亡げる小程に村長右衛門三人は方繞種平們の二度目の筒音高く鐵炮の暗號を錯ぎ樹間より故老壯佼們と共に出來ておそるゝ大法師の身邊に找近着て縛の容子を詰めなり登時、大い那癖者

們の縛の趣箇様〻と有つる隨に報知して那五個の癖者を過半汀渚に斃し留たり。二賊は逃て往方を知れず息絶ざるもあり西へ快々那首を赴て死活を看届けあれと。遽しく先に立て件の汀渚に赴くに猟戸種平嶋平も鐵炮を引提て齊一走近着て斃の仆しる癖者們を此彼と検るに頭領とおぼしき一人の胸骨眉間を撃ぬきて即時に絶命す息絶て統率よりも吐血し鮮血を身に浸されて終に深くうそぶく中に後に斃れし一人の膝節を砕れまぶ痛傷れもまた死ぬを身を起さんとて挿れ死を種平と走り蒐りて楚と押へて動やぶ嶋平も赤ふ佩たる刀卒索の両手を堅く綱めて背を酷く毆擲し敲然として来歴を問へば癖者苦痛に堪ず遂に招道をるを咱們今宵斃されて頭領と倶に五名長坂山の頭の洞中に年来住る山客にて頭領は原修験者にて我鳥蟬坊と唱へ時好に応技を旨とし七地方に毒を流せる国守に捕られて獄舎に

斃されと幻術にて脱出て迹を那里に痕あり然バ這我鳥蟬坊は毎に蜥蜴を養飼て
あてもなく穴窩に禱ると忽ち雲起り雨降そぶり日も暮れども歌とす又隠形の術とよく
あく形を隠さる自由に因てこの術と彼此雨と降しその村人を欺く神の出れる
よりと告ふ酷く誑て許多の米銭衣類どを供物と倡へ備措て夜深てこれを奪
ふと云ふ是今宵のまぶ這村の献供物も五ヶ年以来受納して朝夕の資用にあてさ
も教誨を凝して祭るぶる村あると忽ち又術をもて村の女の子を醜かるを奪略て犯て後に
惟ひもあり或は左右に侍らして愛妾にあるもあり村人これを知らざれば忽地に駭怕
あり神躰あるとて遂に供物を准備て祭祀を奥行せざるは咱們初は我鳥蟬坊に
術あるよりと知るぶるに祭祀の費用に錢米などを運合る人足に央よりも知りて他
居から衣食に富る然も快楽の美味に願ふて洞に留りて却て下あるれども
火家四名は雨と降り形を隠す術を知るぶる頭領の隨意なるに法術至妙の老僧も命

運越に竭る狹那里に人の在りしを悟らで不意を鞁れし両銃に胸前と眉間を脳を破り骨を
摧れつゝ仆れて又活くべうもあらざりしとのみて歎息をするのみ。大八は冷笑ひて
酒家推査に錯ふことなく這悪僧の幻術賊情世に未曾有の奸悪は若们がいふ如くなる
べし。我鷲鞸坊は始よりの件の洞に住をる歟。若们は原何処のものぞ。何の比より月下にきて這
が悪を資ける。汝と共に四個の火家の名は何と喚做したる。其は報よ甚麼ぞやと問へば
種平嶋平も一入声を苛立て快々亶示せのまゝと引提し鐵炮振抗て背を礙と敺悩せば
賊はいよいよ堪ず苦と叫ぶ声戦しても我等のみ今ゆら何をか隠さん。我鷲鞸坊は當初今の洞
より程遠らぬ谷蔭に蓁を締びて権且其処に在りけれども人家に近しとて竊に
所住を移せしとぞ。然而小可は破吹華風九郎と喚做さる一所不住の博徒ぞ。又鞁ねらるゝ這火
家は獏七とて山客ぞ。諢名を四果宜半と喚れしもの。又逃亡たる両個の火家は賽保輔
金山魔鬼夫太と喚做ものぞ。皆是足島許の間民ぞ。身を措所なかりしかば這頭領の
て身に屬て両三稔を歴ぬれども只遠祭祀の獻供物を竊に洞に運容をもて身の費にあてよ
るのみ。這餘の悪事はいまだ願ふ。上大法師法衣の袖もて掩ふて救ひたまひかけよ。寂塞己焉に
なりて鉦を敲き念仏を唱へ徐に餘命を送るべしといぞくと哀しげに諄返しつ陪詰ふけるにぞ
かけたる這招道は村長右衛門と二三名餘の荘客獨戸種平嶋平们まで呆れて目と目を合
するのみ惑ひいまだ解ざりし。大八は冷笑て各那を听る狹這風九郎と竊らんが招道
なく賊僧の伎倆發覺れざれども尚うたがふへしと説諦きゐたるが、なるぐて昨に郷閭に酒家村長
許に赴きて知両老師の徒弟なりと名告て悠々としりつゝ這賊あらんと思ふものぞ今宵必退治
なして人の迷ひを醒さまく欲せし間の方便なる。酒家は如是日甲斐州石禾の道場を退院しつ
下野を投て赴く程に這村まで来つる折黄昏近くなりしかば宿を借らんと思ふて村人の门に
立よりて一夕の宿を請ひしかど皆强顔て兼引ぎ。事情を原れば大沼祭祀の供物の事。
并に法師覡巫を留ぬとなるまで一家主の話説をも初て詳に知りたる因て必ず五个年

大沼の旧は大
池なりしが
むかし赤岩より
大沢の荘とよ
びわけし沼と
なりて赤岩の
下今もその
沼は残れり

前大沼祭を村人に論さんとて行脚の僧ハ幻術をもて姦賊にて形のごとく村人と共に供物を
窃むのミならん今宵ハ正月の祭礼日なれバ例の如く錢と衣裳を藻外船にのせて備へする
といふより頓ち彼の備所から然らバ件の賊僧が衆人去て小夜深て比沼頭へ潜来て
窃盗とするならんと思ひしも亮査あれども田舎児ハ愚直にて那奸賊に魅されて年来を歴
あらん。これハ縦酒家が意表を盡して明らに論すとも只先入を旨として還て酒家を疑ハん。
信用るものなれバ要すべし。とおもひ深念をしつゝ却村長許赴きて只その随に譲りしかバ長ハ吽ける。
這衆人も皆菓引て此も拒まず通て指揮に従ふのミ。汝達這迚の賊僧を亡せを知らで賊
僧并に小嘍囉は彼の名を滅しつゝ。酒家俗姓ハ金碗氏より法名を、大といふ弱冠の比安
房の國守里見殿に仕へしに行状あらざりけれバ。祝髪入道して関八州を遍歴の星
霜二十餘年になりぬ。神を偽り愚俗を誑して民の財帛を掠奪する這賊僧の徒等
なり。然ども今も只我甚麽ぞや譬バ今宵酒家單身もて這沼の渕に埋伏して是等の賊を

殺て捕るともかくていかにぞ支ふべき。然して汝達の迷ひを醒すに足らざれバ非如兇賊をもて。
出家のミづから命を断バ五戒を破る怕れあれバ故に猶戸と央にて是を殺しなバ夫外道を
袪けて正法を盛にし兇賊を退治して良民を済度しつるが則如来の本願なれバ。酒家一
身に関らぬ事を好て功を求て屠殺を旨とせつるにあらざれども亦異べし。那地獄天堂の
空談をのミ宗として衆生の與に力を用ひ酒價を貪て錢を求る凡僧と日をおなじくして午を
同くして語るべからざるも。悟て迷ひハ醒かならん。さても説諭せバ驚きあへる村長ら二次
下の荘客猫戸們まで初て夢の覚るごとく齊一地上に跪きて俺們凡眼明ならねバ慈悲廣
大なる活佛におはしませしを知るよしもなく悖るべしとハ思ひもかけず既に這期に及びても胸中なほ穏な
らず疑ひたりしを悔しけれ。卑に昨非を省れバ大徳の善巧方便にて出没不測の妖賊を
瞬間に誅滅せられて今より俺們利益あり永代不易の大功徳を何の時にか忘るべき許
させ給へ南無阿弥陀佛弥陀仏とうち陪詫て渇仰随喜數行の感涙坐ろに衣領を

濡もまぬかれ伏拜を又額つくを、大いに急ぎ喚立て。既に賊首を獲られども。遂に逃亡こと二賊あり。莽草の根を送をとれば再稲田の害と為ん。這風九郎を御道すがら七又那洞に赴く。二賊と其首を獲ざるべ。慈よ快くと遽がせば大家有理と諾ひて。そゞ中は右の三人。故老們ふたち對して各々八一三名快村々ふ赴たて。御尚は還り一衆人ふ是等の毛を報知と。船る錢と衣裳皮篭を運び返さるべか。その餘は這里る居迷りて。船と戍るもよろめれとなる此彼異議ふ及ぶも。現年若き俺們は件の洞ふ赴くとも。賊を捕捉る資助あるべもあれ。然が這首よろ四能の還を。熟睡を去けん人々の門を敲ぶて。ねく來べ。おを伏までふあら緑ども。洞内の支黨の多く在ん狭料りがさろ。其頭の用心まあれとあろを屬て恭く〻大ふ辞しとぬくもあり。這里ふ留るのもあらけり。當下種平嶋平は風九郎より對ひてあを兎賊听なる狭海と肩ふ引攜く。洞の案内はまく欲を命惜くは去向と報よ。然がまを。左右ろまと合より躯て掖立ぬと。壯佼二名受捕て肩ふ攜け足と持り。金瘡人ふ熟さる戦国の民とく

陳圖ふらぶりけり。小程は、大法師ふ右の三名ふ莊客們と獲戸と從へ。件の洞ふ赴く程ふ。天よく晴て望月の光隈なく明らけるふ風九郎と案内ふ者れば更ふ岐道の迷ひもあらぬ。ぬくと半里餘りふて。長阪山の頭る。一條の岨路ふ老さる弱き枝と參へ。樹木間る処あり。大家其黒赤時風九郎ふ声をかけて。那首の小山の半腹ふ。ゆる洞と我鳥鞭坊の所躯ぬ。とふ大家左右ふ找ち登時種平嶋平は倶ふ持る鐵炮と。合る直。洞ふ向ひて火蓋を反んとせ。程ふ洞内より夫婦とかばふ。老翁老婆忽然と出てゆと抗け推禁ふめて人々卒ふ。ゆる俺們は賊徒ふあらぬ。年来妖賊我鳥鞭坊ふ這所栖と奪れて怨腸と断とゆ。他は素ふとる術長くとく鳥獣と戯勝せると。那唐山る黄公の神符ふ捉るる段あり。ふの故ふ阿容々々とその妻を乳と避け躯て。空ふ光明を過ーたる。小ふ今宵善知識の那賊情を明査あり。輙く他と誅滅せ。れ。拯び何事ふ是ふ捉ぬ。初ふふの毛を知らぬ。ーふ御尚ふ脱れ。くかふ来ふける。賽保朝金山魔夫太ぐ。その進退と決難て云云とうち相譚ひと心とも

文溪堂藏

風九郎
たゞ平

二賊を趕ふて大老翁老婆に遇ふ

るく穿鑿聞く。然敵既に亡びる。綜の趣も詳に知られ且件の両賊へ那厭勝の術もゆゑ。さい是寛家の残黨なれ。俺们これを殺しつる。賊徒ハ才ふ名を他们が外に支黨をし。洞内ゆゑ比ろ合されつ。女子们と金銭衣裳家伏あるを。快々入てとゝ。とゝふ大家亦驚いて近着くゆゑ。獨、大ハ些も驚ぐ。樹柱の間を漏る月を燭ふ。ちらくと。件の公羽と媼とゝふ。要ふ梓の弓を張る八十の齢ゆゑ。欧頭ふ雪相を戴けども色黒くゆゑ。形肱膊ゑ。訥辯ふ。引声をし。身ゆゑ海松の如く極垂まる布の薄黒衣を被くゆゑふ。鹿杖を撫へつゝ。必是妖怪ゆゑんと思へば。佐と立對ひ。やゝ老牝牡何とゝふ。剛才若们が説とゝ。その扱あるふ似くれども。いまゞ素生を詳ふせぬ。衆人怪ぶゆゑ。憶ふ是若们ハ狐狸狢ゆゑ。山魅木精の属ゆゑんと。素生を報ぜ。とゝ。ゆゑて怕ゆ老公羽老媼ハ杖をうち捨跪ゆ。大德許さゆゑか。既ふ明査せられ如く。俺们ハ人倫ゆゑ。三百年来這洞ふ栖なる真猫でゆ。和名ハ素よりみの一字也。猫ても獣でゆ。面ハ狸ふ似るとも。

吸ふのゆゑあり。這頭の俗ハまみとゝふ。性鈍けれ。狐狸と遊べ。ゆゑ。髑髏を被て。人を魅き霊也。形肥れ。色くと避ゆゑ。故ふ人を咬ふ豺狼の悍ふ似ゆ。毎ふ穴居と。他を求ねば園圃を暴ゆゑ。稲穀を穿鑿ゆゑ。可もゆゑ不可もゆゑ。大いに聞て原来老ゆゑ猫でありける。狡徒穴居と人の與ふ害を做ゆゑ。とゝ。ゆゑ。洞を造りて栖ゆゑ故ふ妖賊の奪て這里ふ潜ゆゑ。是若们が罪ゆゑ。今より他所ふ移るべし。酒家這洞を伐崩ゆゑ。後の患を除んゆゑと責懲されゆゑ。老猫ハ詞ひとく陳ゆゑ。縁故を知召ねば。その譴責ハ然ゆゑ。這洞ハ俺们が穿為ゆゑ。のふ。此ハ是大古古墳崩て洞ふ。ゆゑ。咱们が所栖ふ。ゆゑ。日今埋さゆゑ。ゆゑ。是よりの後百二三十年星霜を歴ふ及ハ人畜総て泰平の聖化ふ遇る。歓びあゝ。その折ふ。這頭ゆゑ。繁華古昔ふ類ゆゑ。士民各処を泊て屋上ふ屋を加る。魚米の郷と熟鬧ゆゑ。徒真猫穴と名ゆゑ。逆とあの趾ゆゑ。なりぬべし。且く名せゆゑ。とゝふ。欧とゝ。ゆゑ。人ハ老公羽老媼ハ状形ハ。ゆゑ。ゆゑ。今又

これら這笛の奇異共あらけるぞ。いとも怪もせ！衆人は胆を涙！舌を掉ひて。こゝ、大の徳高ふを曉得く信心弥増！けり。登時、大は此彼と衆人を呼ゝ剛才老猫の云云といふ！は実吏ゆく洞内餘賊ゐかべ！酒家先入く撿せんと四下の竹を伐採りて快き炬を造るぞ。とのふ大家ゐろゐて作り出せ！竹を炬ふ種平们ぐ鐵炮の火薬を借つ火を吹移！て振照火！ゐる壮佼们い、大法師ふ従ふく。種平嶋平共侶ふ找そ洞ふ入る程。右衆つ二さふ前そる後ふ跟てを入ふけ。徒而、大は壮佼们と俱に洞内ふ找入ゝ火を抗さて四下を呼ふ奥ゐいと廣ゐ。席蔦六枚を布ゐ。我鳥蟬坊の臥房ゐるべ！夜物あり。家伏もヨヲろ只い這東西のあるのをゐ。で年尚弱紀三個の女子の累り俯ゝと泣くを、大いゐちそを右衆二们ふ扶起ぎてよりを問字則是五六年已前我鳥蟬坊ふ掻攫れて他ぐ愛妾ふせら居！とふ故郷を向へ葵岡屯這人々の相識れる某甲某乙の女兒ゐけれ迭ふ名告りろ教馬くゐでる教ぶと大々ゐ。然べ件の女子们い、大法師の方便ゐて。妖賊誅滅せられる。

譯を呼ぶて再生の洪恩德義をぞ仰ぐ感涙の外ゐろを、大は然ゐを慰めて又右衆門二们と共侶ふその次の房を撿ゐふ這里ふ果して賽保輔魔夫太们の戸骸あり。俱ふ咽喉を破られて全身鮮血を塗れゐ。必是牝牡の老猫ふ咬殺されゐけんと人魚猜ゐ嘆息ぞ這餘ふ銭あり米さヨヲ紀を、大は一切ゐ分ゐ只い女子们を勸らて。疾く洞ゐより出ふけり。當下村長右衆つ二ふ壮佼们ふ指揮ゐ。東西皆運び出さたるぞ中ふ酒をあり。菓子もあり飯もあり！ど、大ふ羞めて餘れるを皆共侶ふ飲食ひて饑る腹を頤ひけり。余程ふ、大法師は洞内より出！る贓物を熟視て米銭は是国土の至宝聊なりとて二無べ！ど這餘は汚穢れ不義の材燔捨るそよろめれとふ。大家推辞難ゐ椀碟盃盤家伏席蔦ゐを出せ！隨ふ積累ゐてよを蕉火を差寄れば折ゐ暁ゆく山風ふ吹れゐ燃る程てそあれ皆灰燼ふゐるまけり。事ゐ終ふ果！ゐ種平と嶋平は洞ふ入る折樹下ふ縛系措紀ゐ風九郎と牽立んとをけゐふ。ゐも亦咽喉を破られて何の程ゐ

文溪堂蔵

死してあり。原来又那老猫が漏さじとぞ咬殺せしなるべし。大かたかくて這風九郎ハ鵞鷤們と同悪の草賊なれども這者獨死ざりければ鵞鷤坊が積悪もその賊巣しさへ知られて他臘節を毀破られて廢人になりぬれバ命を助けおきせんと思ひけるを未のぬ間に那老猫が殺せし欲正に是天罰を脱れがたき悪業報なるべし南無阿弥陀佛と念じつゝ却衆人とゝもに立かへらんとせし程に山峡既に明まけの浩処に人許多這方を投て来ぬるとおぼしく声譟しく喚ひけり此ハ是別人ならで郷岡に大沼より返されたる故老一二名ハ村人們の门を敲起て有つるよしを報知せ更に亦促まで舟楫船なる銭と衣裳とを右衛二許合を斂さしたるその事既に果しかバ、大并に右衛二們を迎の為に来つる。然バ又右衛二們ハ目今来つる村人に洞の光景女子めなる又小嬌嬢三名ハ皆老猫が咬殺せし鋅の趣箇様々々と一五一十を報知して三個の女子を指示せバその親なるもの叔父なるもの迎に来つる隊にあり往方も知らぬ存亡も知らで五稔過したる親子の再會逆の歓び孰に喩図

あることえれバ掌を合するもあり携るもありて外視も羞ざらち泣にしをも痛くに心つきけん。全く大徳の洪恩世に有がたき活佛に引接せられし利益にぞと稱へて倶に身を轉して、大法師を伏拝みて齊一欽びを演おけり是よりして殊ゆゑに人多くなりければ幾十貫の銭我分ちて藤葛蔓に縢て擔荷にもあり又米苞を駝搭にもあり或ハ、大の先に立て連るに路次開くもありけり尓程に、大法師ハ朝日高く登りし比衆人に懇請せられて又村長右衛二の宿所にかへり来ませしかバ一家児の男女出迎へたる尊敬尤浅からず躬て客房に請待して、齋飯を羞めなどせし程に主人右衛二故老種平嶋平ハ昨宵祭祀に与りしも与ざりしも推並て老弱男女二三百名咸這宿所に聚合来つ、大を拝して功徳を謝して願ふハ大徳俺村に菴弁を造りてまゐらせんのみ留りねかしと請求るもの多かりきを、大ハ聴ず頭を掉ていかでくハ然る事をせん這家ハ年来行脚を旨として且志をなおアて去向を急ぐの者なれども這村人們が妖賊に魅されしを悲くに忍びず窃に智計を旋

文溪堂蔵

らて。地方の患を除ケの。一日も留る暇いなしと。強面く答へ別を告てゝ立去んとすれば。右衛門三故老們も留難く商議て。供物の輿を集めて。那五十貫の錢を。金を兄布施と唱へて贈れと欲せを。大八此を受ずして。詞正く諭さう。捨八是有漏の縁ふて。法師を肥せ毒菜を出家八苦提を寶とを。徒る故ふ大集経ふ妻子珍寶及王位臨命終時不隨者と説れを。酒家八乞食行脚して。苦提を求るの為ふ千金を。ども何せん。利ふ縁り心を動して。お布施物を受納ず。亦那鷲鞭ぶ奸計と相距ること遠く。を五十歩百歩の間なゝ。近来八山内扇谷両管領ふ武威既ふ衰へて。東國一日も静なれば。奸民盗賊折を得て山ふ憑り海ふ浮て。奪へども飽ざる八是良民の不幸。定正主八程遠く。五十子の城よりも。軍旅ふ追ふ故欲長阪山ふ一賊ども。緝捕の沙汰の。なきを。浮屠家の慈悲八。報ひを受る。為めんや。願ハ村長故老輩。要ふ錢と衣と散〻。鰥寡孤獨を賑さず布施して。浮屠家ふ媚んとす。薬捷ふ功德ふん。暇なく。捨て人禁ども留ら。袖うち拂ひ外面へ出て。草鞋の紐を結ひ。錫杖を突鳴〻一又回向て。北を投て。立去りける。功ふ誇ら。利ふ疎き。這勇僧の挙動。村人ども尊信て。総て餘馨を惜まけ。偖而、大八旅舎を出て。王又只一日ふ。肚裏ふ出ふ。いま日酒家石禾ふ。指月を退院する。折那四大士ふ言を送て。穂北の宿所で俟んとを約束を。ども。ならく思へば。穂北の長ふ。永垣殘之夏ふ八原是結城の落人。喜吉ふ。篭城せ。ものと。偽なるを。立奇く。逗留せ。夏ふ必大念佛の施主。ふ。くんと。詰ふ。べし。約莫今年の念願八里見殿の奉為ふ。他姓の施主と参へて。本意ふ。錯るのを。俺君侯の瑕瑾ふ。暴ふ君侯ふ。賜りける。般若も今ふ。残れるの。加るを。這年来募縁の一錢微塵。蘊へ。今一番の費用と。辨ず。偖れば。永垣ふ宿所ハ立寄ずを。上策と。非如四大士。信乃道節ハ。約束の差ふ。大塚の

成氏を一…舊録に重…氏と書写…然れば當時…の唱に…ずるよしなれども世の人…なりと唱へ来れるにこそ…久しく…伶唱の…従ひのみ…と前輯に漏したれば…ここに追記す

大父大塚匠作三戌は結城で戦殺せしものなれば四月十六日の忌辰に招ぎそも信乃们は来るべし。因て去向を復思ふに嘉吉の乱の總大将結城氏朝王の季子なる結城四郎成朝主は成氏朝臣の御方にて今は結城の舊城に在り是も亦洒家大念佛の事情を勞れなる施主にならんとしられやせん。此に就き彼に就きても今番嘉吉の亡魂を吊ふは深秘あそその期に及びて執行せん。吁奈何と肚に問ひ腹に答へ惑く程に分別既に決りぬれば穂北の荘を過りしが彼の氷垣が宿所へ立寄らず其頭は遊逆を傾けて遠ざかりし路次をぞいそぎける。

○この年伏姫は十七歳、大は二十二歳にて卒られしより降て今茲文明十五年に至て星霜相既に二十六年、履歴附ての金碗、大は長禄二年に伏姫自刃の折祝髪入道して安房を去りし是年伏姫の如く年闌てその表様らず。竟に八霊玉の止る所と犬士の由来を知ることを得ざりき。ども這僧の世に見れしは第四輯なる行徳の三段と第七輯なる石禾の段のみぞその趣を書に漏たるを世の人只看過したるもあるべし。因て今這三回あり、大の與

湯嶋の郷…今は湯嶋と呼なり。和名鈔に武藏國豊嶋郡の部に湯嶋の郷名…豊嶋郡湯嶋之…

演る所真面目を顕したるの智慧と勇敢と越に初て瞭然たり。かくの如くにあらざれば伏姫の義侠と對するに足らず。又犬士们を御道する大先達と做すに足らず。這書我ぶめ勘らねば婦幼の輿に数言もよく看る人は余が言を俟ずしも分明なるべし。

○按するに麻生に合龍前坊と喚做す所あり。那里は二百年已前茶毘所なれども物にすえたるあるは合龍前坊は人の名におなじからず。此は称呼を借用すれども字の同からざれば則作者の用心にて這餘編究の考証は本輯五の巻の附録に載す。

第八十八回 湯嶋の社頭に才子扇を賣る 聖廟の老樹に従者猴を走らす

再説武蔵州豊嶋郡湯嶋の郷に祭られます天満天神の神社は、文明十年に太田持資入道建立ありしに這地は夫木集に見えたる登蓮法師が一人の忍の岡の花もて先靡く心地してそれ（又廻国雑記にも忍の岡の歌見えたり）と詠りける岡の邊の南にあり（北国紀行に湯嶋の辺）

上野ハ北條分限帳ニ江戸圖ニ方上野と記されば俗説を破るに足れり

ふて。こすれ志へ春風吹むかへ都まで遠く吾妻の袖の梅が香と。又東北ハ上野の原北條分限帳に見えたり。浅草
寺に至るまで都の手態知るよしもあらじ無下の田舎でありけれども。這神社の毎月十日に詣る道
俗ヨヌかりければ飴餅果子まいらせ、鬻ぐ坊賈斟りゃ毛兒師放下師刀玉の猿樂を做ものも
あるが中に坐敷手餘鎌の技をもて肬黒子を除く薬と磨齒砂を賣るものあり地方は花
と華やぎ。白面優美の壮佼も打扮さへに精悍なく身には太織紬の染衣を被て裁着の
括袴に肬膝に跨做なる肩には緋の縮緬の襷襌を掛て高足駄をさへ穿なりける這里
にハ看官ヨヌかりければ巨竹を四本樹の垺を綿繞らして戯場の界とも後方には八九
尺の花田と薄柿の天幕を仰反形に張亘して坐敷に大刀と餘鎌を竪ざまに横ざまに飾光
らしたる左右に黄銅の皆具ある貴薬箱子を基に措て其身ハ発兒に兒を撲る姑して
坐敷手師ハ発兒をたれて恭しく君が集の衆人にうち對ひて今日も相替らず各位諸君御機
嫌よく本社へ御參詣の序次を以小可店鋪へ處陝まで立寄らせ給ふ玉披ひとれに捷ものなし。

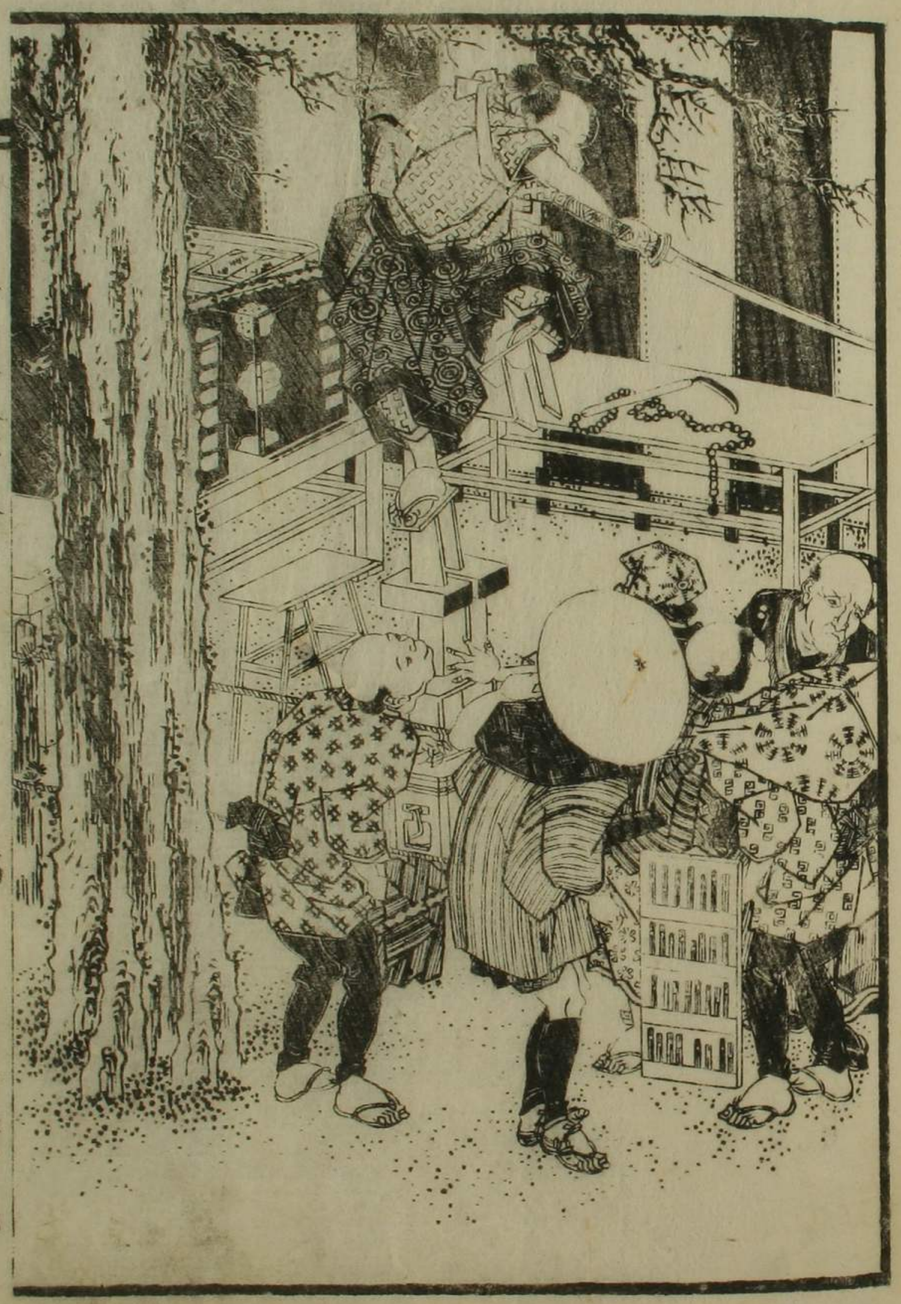
日每に御披露仕る小可家方の妙薬ハ唐山玄宗皇帝の御時に羅公遠と云仙人が楊
貴妃に傳授せる神仙丹丹の靈剤にて面部に足に生じたる肬黒子を拔去る事市に塵を
拂ふより易し又這磨齒薬ハ世に多くある所の房州砂にあらず寒水石を打碎して水に浸
未細末にして如にする丁子龍腦肉桂乳香沒薬を以毛寒水石ハ石膏也石膏ハ味辛微
寒にて毒なし心下の逆氣驚喘口乾き舌焦れて息する事能ざるに即效あり又乳汁を下し齒を
揩ひ齒を益し胃熱肺熱を除き氣を益し陰邪を散し留飲を下し太く渴きて飲を
引くと中暑の潮熱牙痛を治す這餘の效能最ヨヌかり枚擧るに遑あらず縱その汁液を
飲て腹内に到るとふとも大益ありて小損なし那房州砂の齒を損し脾胃に害ある類にあ
らず毛薬剤御用のお愛敬には坐敷手刀の拔ざるを餘鎌の使ざるをご覽笑ひに歎べきなん尚
又吉凶悔吝の刀祢達もましますべし人相に相好に儘して吉凶を判斷せん此ハ是面部の黒子
も人相の吉凶に拘るものなるをもて小可這技に疎からねば相術の是又坐敷手の後にあん

十八般の武芸は簡稿綿縄套子詳るべし姑く愚意を以て傍訓を施す高考明朝少林寺の拳法此間の槍棒槍火砲銃九省の武芸あり兵録に載る所あるべし如一

好み儘さべし。然る刀剣逮ん居送りて。徐ろに問せぬか。却是よりの坐敷手の辨論。その崖略を稟さ演ん。坐敷手ハ原是巷路軍又組敷よりの起る所。坐して脩刀を援んとするの術を知らば。腰の刀剣ありとへども。奈何ともせんさべ。此ハ是唐山の所云十八般の武芸なるものの。那十八般の武芸と云へ。一チ弓二ホ弩三ホ鎗四ホ刀五ホ劒六ホ矛七ホ盾八ホ斧九ホ鉞十ホ戟十一ホ鞭十二ホ簡十三ホ槁十四ホ又十五ホ又十六ホ杷頭十七ホ綿縄套子十八ホ白打是ハ明朝の武芸ハ白打と第一とす白打の拳法の類ハ河西の少林寺の拳法を世間ホ多ク所と一書ありたり。這餘捍棒打擂火砲銃九省の武芸ある兵録ホ載る所槍棒の題目極く多ク。近屬明の英宗の正統の季年ハ山西の李通とかの武勇ホ人のよく敵さべ。その技芸を試ルホ十八般ハ。これをもて京人ハ教ルべ遂ホ首選ホ応ぜ。武職を授けらるれども勲業ともて顕れざるべ。とぞ水滸傳ハ宋の徽宗の時ハ十萬禁軍教頭とかの武職あり。皆十八般の武芸ともとかの。此ハ是寓言ハ本邦ホも中

業ホ。武芸の題目多くあり。今ハ二十八般あり。奥ホ。その崖略を稟さ。一ニ弓二ホ弩ホ剣ホ騎馬四ホ眉尖刀五ホ鎗六ホ水戲七ホ隱形八ホ拳法九ホ鐵炮十ホ草蚕目十一ホ火矢十二ホ棒十三ホ鉄十四ホ鐵扒十五ホ鐵叉十六ホ十字ホ十七ホ烽火十八ホ大鉞是ハ。あれハ加ルホ流鏑馬笠懸大追物牛追物水馬坐敷ホ鎌鎌騎射騎射騎馬炮銃銃共ホ二十八般是後世用ル所ノ武芸。上古ハ弓ホ矢ホ鎗ホ。弓ホ矢ホ鐵炮ホ。拳法ハ近曾明人の伝る所又是白打の一法。扶又仕候ホも巧拙ホ。又甲冑の環ざるホも。師伝ホ。ホ。武士の一術とも。新田左中将家の相傳ホ。義家朝臣環甲の圖説ホ。環甲と云甲を被ると。就中鎌鎌ハ本邦古ヨリ最上の武器とす。然ルホ。大織冠鎌足公藤巻の鎌とて。逆臣入鹿と誅ルホ。又唐山の鉤ハ鎌ホ似て。最上の武器とす。呉越春秋ホ。呉王の鉤ハ干将莫邪と伯仲。鉤ハ劒の名。又曲刀。又能ルホ類。這餘ホ種々の口傳ホ。長口状ホ。退屈の方ざるホ。とかるホ。然ル先坐敷ホ刀の技ざるホ。卿覽ホ入ル。扇を推畳

湯嶋の社頭
お茶賈人坐
斬る大刀を拔
く處



そく腰ふ掩ーて。後方ふ撓る巨大刀。左右ふ合りて。徐ろふ又看官ふうち對ひて。本邦近来軍陣ふ巨大刀を用るハ武威を示せる輿のこゝろ。ヨヲくハ箔打の木刀を唐山ハ倭る器械ふ。水滸傳ふ関勝の綽號を。大刀といふ。大刀ハ薙刀の類ふ大かたまゝ。是ふ肉せ這巨大刀ハ木刀ふひゝを。長短ハ柄頭より瑞まで。通て四尺八寸あり。刀ハ脩ー。臂ハ短ー。拔んと。るふ拔くを克ハ。是を拔くと腰ふあり。とのひて刀を合る直ち。箱子枕頭三寸を。臺の上ふ積登ー。高足駄を穿るふ。件の枕児の頂上ふ片足を踏撓け立あげ。るふ自若として眸を。眺て片膝を折。片足を後ふ遺伸ー。腰ふ挿る巨大刀を。拔んとして。いまだ拔ぬを。忽地ふ耶と声をとりけ。丁と引拔く刃の電光。敵人活人秘決の刀法瞬間を。るに。まぐれ使ふ工半晌許精神連らふ住境ふ入りて。月落る時星流れ。雨霽れる時虹横り。朔風雪を散ふ如く。沙水ふ布を曝ふる似て。閃々見々微妙の絶艱。又らふ。もあらばれば看官。弁一喝。来ふ声。霊妙時ハ鳴も已ざりけり。既ふーて。坐敷る師ふ。徐ふ刀を

鞘ふ。歛めて。枕児を拂ふ。片足と。倶ふ。礙と。頽る。數層の。基子を。ふ。閃りと。下立る。世ふ。玠ーに。剽捷を。只。顧。感嘆せざるハなく。或ハ。磨。歯除。黒子の。茶を。買ふ。のまゝ。ろ。貫果て。坐敷る師ハ。又。衆人。ようち。對ひて。是。より。又。鏃。錄の。一術を。ふ。自ふ。被。くれども。今朝。より。數。遍。のるれば。聊。疲労。げるふ。あらず。且。中休。ふ。仕ら。遽せ。のハぬ。刀。祢。逢ハ。るふ。ん。足。を。駐め。のひて。商ーの。ふか。ーと。ふる。衆人。侯。不。樂て。還。るハ。ヨヲく。止。るハ。西。二人。ふ。過。ざりけ。そ。ば。中。ふ。一個の。武士。あり。皂蛇皮絹の小袖を。被て。朱鞘の。両刀を。跨ハ。深編笠を。戴。るが。向。より。後方ふ。立。在て。件の。坐敷を。視。ーふ。傍。ふ。人の。稀。ふ。ーと。折。ーて。ふ。ん。找。寄。りて。坐敷る。師。城。ふ。やくと。吸。ひ。ーて。編笠を。脱。捨。るを。ふ。れば。月。額の。迹。長く。伸て。色。薄。黒く。眉。秀。眼。堂。浄ふ。鼻。梁。直。卯。りて。身。材。高。壮。佼。却。這。武士ハ。雁。鳥。揚ふ。坐敷。師。ふ。ち。對ひて。俺。も。向。ふ。這。里。あ。りて。和。郎。の。技。芸。を。熟。覧。せ。ふ。江。湖。上。の。坐。敷。る。師。の。浮。る。技。と。同。ふ。ば。一。進。一。退。法。を。稱。ひて。聊。も。空。隙。ふ。ー。是。と。軍。陣。闘。戦。の。間。ふ。施。を。あ。べ。よ。く。嘗。る。べ。ー。

又只武藝のみあらで和漢の故実と並挙て衆人を示しるも亦架空の談義あらで文備あるあ武備あるとハ係る人をやらんぐらん只管感じおよぶと今亦問ふく欲

況あり和郎ハ某と賣る與る面相る相も需ず応ずとふつるハ実語る欲脂墨子も面相ふ宜しかるその故奈何と問ふをもち所ふく坐轂る師ハ更る阿容る乳色る憶ずも微

笑て仰ふけるいハ世渡り種る拙技と日毎る観る人多れども君ず如ハいと稀ス風鑑の技いも学得るふあるねどもその書あれば古人と師とせ獨学孤陋杜撰もあるべし徒れば坐

轂るのるとも然いまでよ答さぜのひてハ学ふくる當りがるいと恥ふるるる問ぜるハ亦ハ凶ふ吉を風

鑒家ス十觀あり眼下を男女とも又名けて涙堂と云陳氏の相書ふ涙堂を蘧憊斜紋

あれが老ス到て児孫と尅ずとふ是ハ又眉後を移遷とも左ハ移宮右ハ遷宮るり相論ふ

云遷移宮若昏暗缺陥て及黒子あれば出入る宜しかるず虎狼ス鷲ずとふかの如ど

況脂黒子も拔去るとハ患ひず。とふを武士ハ冷笑ひて。俺ふく荀子ス非相の篇あり荀

卿の論ス云形を相るハ心を論るハ如ず心を論るハ術を擇むス形ハ心ス勝ず心ス

術ス勝ず術正しく心正を須ふ則形相ハ悪とハ雖も而心術善るれば君子たるス害ず形相ハ

善ずとふとも而心術悪るれば小人たるス害ず君子の吉とふ小人の凶とふ故ふ長短

小大善悪形相ハ士凶ふあるべとハふ且これを徴ずス古の聖人大賢衛の公孫呂楚の孫

叔敖葉公子高孔子周公旦皐陶閎夭傅説伊尹尭舜禹湯ハ皆ス善相ふ

ら所ふるとも以ずその言聴くべ。その論味ふべ。然るを説相家の取捨る所龍形虎鶴

形獅形孔雀形鵲形牛形猴形豹形象形鳳形鴛鴦鷺鷀駱

駝黄鸝練雀ずの形ス似るを富貴の相と。猪形狗形羊形馬形鹿形

鴉形鼠形狐形狸形の如ハを兇暴貪薄夭折の相とず夫人ハ萬物の

霊ふ。ずれふ貴ハ人。龍虎鳳凰獅子孔雀ハ皆是禽獣ふ。人ふ及ず人の身

これを似るとふとも吾ず吉兆あん加旃味粘高彦根神ハ天稚彦と相肖ず亦

壹岐直真根子ハ武内宿祢と相肖たり。共ニ是一身二體あるが如し。そもそも妻子兄弟とハいへども。よくこれを識別するの事ハ。そのこころ術と命の長短同じからざるなり。又平将門の家臣ハ主と相肖たるゆへ。六名あり。されども。その勇将門ハ及ばず。又源頼朝ハ身材矮くして頭一斗の瓢ハ似たり。されども名将なるハ害なし。又梶原景季ハ面白くして。狐ハ似たり。されども勇士なるハ害なし。是史伝ハ載せ。所々然るを刻五尺の身ハ粟粒なるの黒子あるとも憂とハ為ざるとあるんやと。詞せるく。説破るを。坐敷の師匠ハ頭を掉て。御論ハ是ハ然ることあり。然けれども五尺の身ハ一分の鋭芽の入るとハ。苛々として堪がたし。倘抜ばと日を経るとハ。遂ハ患を為ざるとあり。面部の黒子もこれハ同じ。涙堂穆遷ハあるゆへ。ことく除去ざれば憂を為ざるとあるゆへ。人の身ハ在る所の黒子ハ隠るゝを好とて見るゝ。そもそも一ハ漢の高祖ハ身の内ハ七十二の黒子あり。そもそも異相とも黒子の吉凶推て知べし。太応神天皇ハ腕ハ鞆の形あり。そもそも異相とも。和漢の明證類して推べし。抑風鑒の一術ハ孔子の教ハ。そもそも一方ハ偏る学者ハ荀子の非相を甘じて信ずるハ。そもそも。素問内経ハ色脉あり。色脉ハ観相ハ唐山ハ上古よりその人ハ匱しかるに人の形局をよく相するのことあり。牛を相し馬を相し。剣を相し。筋を相せし。寗戚伯樂虔煥東方朔ハ如此ハ至て是を小技とハいへども。ヨクく沒ゴ之神術ハ是等の形を相するのことく人を相するハ。その色脉を視て生死を辨し。声音を聴て邪正を知る。低る故ハ宋の陳希夷の相書ハ云夫相貌の好らんより心田の好ハ如ず。若相貌の堂々たるもその心田奸険なるハ富貴も日あらず。貪婪ハ貧窮ハ。その相貌を視ずして先よく心田を看よ。相あるを心なければ相ハ心ハ従て滅ず。心あるて相なければ相ハ心ハ従て生ずとあるハいかなる。是神相の大関目なり。思ずハあべからず。そもそも人を相するハ形ハ。そもそも心を相ず。面部ハ気の鍾ル所。喜怒憂樂愛哀苦の七情胸ハ発るゆへ。俄然として。その面ハ見れば。とかくして。二尺の童子とハいへども。その気色を看て知る所以。相ハ心ハ従て生ずるとのあれば。然ば佛説ハ三十二相

十觀十二宮の外を出ぎその獸形禽形に似ると以斷るのみ。壁喻をその義に示せ
のこ人の形局と獸の如く禽の形に似すくきるも同じかぎるとを沒ぎ小とのく大に壁言へ
卑とのそ尊に喻るとに萬吉又あり。說相のこ限らんや天子に龍顏逆鱗とのし兒
孫に麒麟兒千里駒とのし暴虐に虎狼野心人面獸心とのが如に彼とのそ此に壁言
ふ鳩胸猫舌猴眼俗語とにへも皆佳とあれらも古人の杜撰とせん欲天朝の二善治
行伴廉平安倍晴明少納言維長の諸賢と相学の達人とも上世に聖德太
子の出宗峻天皇と相一ぬこ鈴鹿の老公羽が天武天皇と相一ぬこ說
相者流に引出て明證とのもあれどその術後ゐるれば。いつもあり。けん今ちに考る所
只宋明の諸說によりて聊愚按を演るのこ用捨は君に隨意るーんと欲る辨論委こ
るく才幹言句に見れと件の武士に感嘆と。適愛に宏論俊才尚春秋に富るぐ。
文武に長に高るれ然ば今某と一相と。とるべ。とりて近く找と朝に坐數

師に熟視て十二宮通てより勇に義を守り明君に仕て名を成べ百日と出べ。
虛牧馬の後に欲とあるん此に是後讖と先當要と看るとに天停に殺氣あり是宿
怨ある故に仇と覘ふ人に似る田宅地圖豊滿と勢に天庭に朝ぎれもその色黃
明る故に謀遂がて。遂ぎて遂るぶ如く數る果さぎとその仇死べ。土星の黃るに
吉昌とのを武士に推禁めて。噫声高に四下に人あり慢に大事とのべるに和殿に素
生も吟すくほく。俺らへも詳に生ぐとのと思べども目今に折ぎ折り羽の朝開に又あべ。その
折芽と買んぎと詞と迷別と生て編笠合てうち戴に東と投て還りぐくと雲妄時
目送る坐數る師も倘や公狹といべるよいで名殘と惜けり這折ぎも立去ぎで此彼の
問答とうち笑る一個の旅客あり。僧に人のるに在そいそく找近着て坐數る師ようち
對ひく。咱们も亦宿望あり。堂の紋理と看くのねとのに坐數る師いるるく。賣
茶箱子の下亜より。水日明鏡と出て来て。先旅客の相貌を瞬もせぎ得と觀て誘と

左右の掌ゟ鏡を翳し彼此と視て旅客ゟ示まをす。人の面ハ根本と身足ハ枝と又幹ゟ。
て　ゟ吉凶ありとハへども面部を合て視るとハ。その根本を失ハぎるゝて先面部を視て合
考く掌ゟ相を攻るゟ。坤離の間ゟ×かくの如く交紋あり。ゟ身ハ人の假子とゟて。俱ゟ家を
興きとある狡然ゟぎハ異姓と同居きべ。古人掌ゟ相の妙決ハハ卦十二宮と排列て五行を
以分別き人指の下ハ巽中指と丑名指の下ハ離小指の下を坤とき。ゟ名ハ離紋沖乱結
せゟヨ考くハ是労碌考く。進退定ゝ〻ゟ考ゟ。且朱雀の紋生て掌ゟ向ハ来れり旦又
官災と惹くとあり。考れども幸ゟ又紋あり。料ら〻人の資助を得て災初て息べ
とハゟ旅客胆を洗て看らゟ如く些も錯ぎ今ハ何ゟ隠き咱們ハ越後の魚沼郡小
千谷の郷ゟ名も高ゟ石亀屋次園太と東逆旅主人の乾児ゟ。百堀鯉三と喚ゟ。
哥々ハ原是角觝の最手ゟ人ゟ肩ゟ侠気あり。ゟ去年夏の比大田小文五と云
武士の浪人ゟ宿せとありけるゟ船虫と云ゟ盗賊婦ゟ大田ゟ舊怨ありとゟ。假聲女ゟ

成り近着て小文五刀祢を刺んとせ。組伏せゟ生拘りて。庚申堂ゟ繋れゟ。然ハ
件の船虫ハ小文五刀祢の義兄弟大川荘介と云ゟ猛者と欺ゟ来て解て。夜宿
所へ送らゟて。刺殺さんと考ゟ。那大川ゟ。その機を查て賊の頭領酒顛二と小嘍囉
们と繋ゟ捕て。ゟ又船虫ハ逃亡たり。大田ハ恁ゟ地方ゟ大功あり。れども。守の母君
片貝殿の憎せゟ。ゟ。哄引寄せ搦捕て。竟ゟ首を刎られゟ。その折ゟ俺哥々ハ。
件の大川大田と救ゟらんと氣を焦て。児品子俄を喚取ゟ。商議せ。れ折ゟ。ゟ片貝ゟ
幾番と云く。赴ゟ便りを求め。誘んとせ。程ゟ。宿所ゟ存る日ハ稀ゟ。然バ又哥々の女
房。その名を喝呼善と喚ゟハ後妻ゟ。と年もゟ。酒を好ゟ。心ざゟ。ゟ。ゟ。
俺身ゟ同ゟ乾児の壮佼泥海土大二と何の程ゟ。情由ゟ。哥々ゟ。夢ゟ。知
ゟ。大川大田の大阨を救んとせ。綜の紛れゟ。嗚呼善ハ那密夫と。會ゟ。
遂ゟ哥々ゟ襲ゟ。れ。と。憤ゟ。嗚呼善ハ怯ゟ。ゟ。ゟ。誘ゟ

ければ哥々は老鈍氣て追も出さず人食歯癖く歩ひ〜かども現生嗟でも磨黒ぶでも花さくら
駑馬ふぶんぶ多りけん日屬の氣質に似けもの。土丈二尺の鞭撻懲〜と出入るとて禁めつる。
奸夫淫婦へ幸ひ免れるを歎べ〜ぶと恨〜く思べ〜此彼密山談者つけ土丈二尺一日竊ふ片
貝へ赴て守文訴稟者つ石亀屋次圓太は鄉尚ま大川荘介ま數られる童子篇子酒顛
二門と密々れ交そ贓物を買ま者つ賣ものせ多いとヨヌ。這舊悪を人知りされが竟ふ
聆る入の思〜小可は次圓太が乾児ゆてけへども。その連係を免れ與ま竊ふ忠訴〜ま。證
据は是でひとつ。推つこりける短刀をぶ仮守文まわ〜せけ。その短刀は去歳の夏那賊婦船虫ぶ
小文五吾刀祢と刺んとする。東西ありけれが那折ま訴稟者べつ〜を綜ま紛れ〜その美ま及ぶ。
大田刀祢の俺哥々ま遞与せ〜とゆ〜ふ又鳴呼善ま遞与て藏措に出ぬ。然ぶ〜鳴呼善ま
土丈二尺。齋〜と良人を吉辛ありせんと。右の如くま計載つ。恁而片貝の別館ま。有司奉りて
詮義あり〜ま。誰〜知る人ぞの短刀は木天蓼丸と名けられる。長尾家の重宝あり〜。紙村

兩の名刀ありや。鑑定の與ふて。旦暮ふ御家臣笠童山逸東太が稟ま儘〜。そ武藝の
師と多える。下野赤岩の鄉士ありける。一角武遠許遣されは那縁連の故のそありけ。木天
蓼丸を携て逐電〜て往方を知らぬ。その故る白井殿の影春
穿鑿あり〜ふ那一角は妖怪ま真の赤岩一角の子ありける。大村角太郎礼儀とふのの殺
され角太郎は大角と字を改め故鄉を去て是ま往方は知れぬ。恁て件の木天蓼丸の
穿鑿照験ありたれが白井殿の惜ませのひて。憤り大々ありれど。術竭て三年稔空ふ
過ぬ。ひ〜ぶ恁の縁由のありけれが片貝殿の最太ら哥々と疑ふ憎ぶ。俺哥々は搦捕せ獄
舍ま數ぶ。却て丈二尺を誉ま。過分の賞錢を賜りけ。嗚呼憐むべ〜俺哥々は奸夫
淫婦ま誣られて冤屈の與ま獄舍ふ在り。仕り我番と。ぶ責られて木天蓼丸と竊食る。
出奥と那縁連の所在と尋問れども其頭のありふ〜と夢ふぶ。ま知るとあらんぞ。船
虫が懐れ〜て大田を刺んとつるとり。外れ〜ぶ。有つる仮は箇様々々と稟〜。美伏

せざりしを片貝殿と女儀ゑれびいよく憎せるくども別館の執事る稲戸津衛田充主人
邪正を照火を智慧あり。寃屈るんと思れけん去歳の暮より呵責と制めて活しもあるぞ
殺しもせぬみづから兼伏まつるまで久しく獄舎ゐ置るべんと計ひと侍そそろ。尓程ゐ淫婦嗚呼
善ハ思ひの隨ゑ謀課せて良人を陷れしと世ゑも人ども憚らぬ幾程もるく主人二と後見の
與ゑとそ。宿所ゑ召そり家事を任しと夫婦のごく府内合ると誰を憚ゆめるけれど主
丈二ハ片貝殿より賞殘さハ賜りそ御沙汰宜しゑのるれば有數ゑ守と憚りと面目明ゐ
ひなのあるに日屬ハ児呂呼子儀と虎の威と借るの多れども恃る折ゐ皆阿容く
哥々の與ゑ力と盡しと義ゑ走るんとるのゑ最朽惜く思ども錢さへ商議敵ゐ
匿況。俺身ひとで爭何ハせん現片糸ハ線まるるぞ孤堂ハ鳴るるがごとく氣とのを悩こと
公支ゑ。そろる言人ゑ問試しゐその人の誨ゑ。去歳の夏より白井殿根尾ハ両晉領扇谷の
とゐん和睦の風声ゐ。綽やう奪くゐ整ひて今春ハ御對面ゐるべと沙汰せ侍ゐ扇谷の

キミツ美人に妻を上まるとハ足利家の時の俗稱ハ京師ハ今も為ゐ

おと上さゐ鮮目御前と唱まるゐ白井殿の叔母君ゑ女儀ゐ稀ゐ思慮浅るゑ。慈
悲さハ深くもはもとりと侍そるゑ。もあるよりて思ゑ和殿其藏の五十子ゑ赴ゑ。城
内ゐ由縁と求め。鮮目御前ゑ願ひ禀しと次周太公翁の寃屈のよりと。歎ゑてゐ憐愍を
ひもまるべ萬ゑひとり那方ざゐるよりゐ詞をゐれて白井殿へ御沙汰ある欣然ゐるまハ片貝
殿へまるさゑと。救ひせのゑとりやゐるん是より外ゐ段ゐあるべ誘へ試ようとのゐれゐれば力
づゑと。合ゑ東西もとゐ。躰て小千谷と啓行しと夜を日繼て来ゐけれど五十子の城
内ゐハ相識もゐく由縁もゐるぞ然ゐ那里推糸しと愁訴とせんいさべゐと左さゐ右ゐる
思惟るゐ這菅原の天満神ハ人の寃屈と救せゐ御誓願ゐると欣ゐけば先神社へ七
日ごろまゐそ祈禀さんとゐりハ起しつけハ初て拜まるるー下向路雲妻時和主の坐數ゐを
視て。稍衆人の立去る。折をゐろて堂ゐ相の吉凶と問げゐ看るく判断喞合しく人の貧
助と得るとゐべ念願成就ゐべ。とのゐれしゐの秋しゐ長物語ゐなるゐたり。什生ゐる人ゐ

物四郎

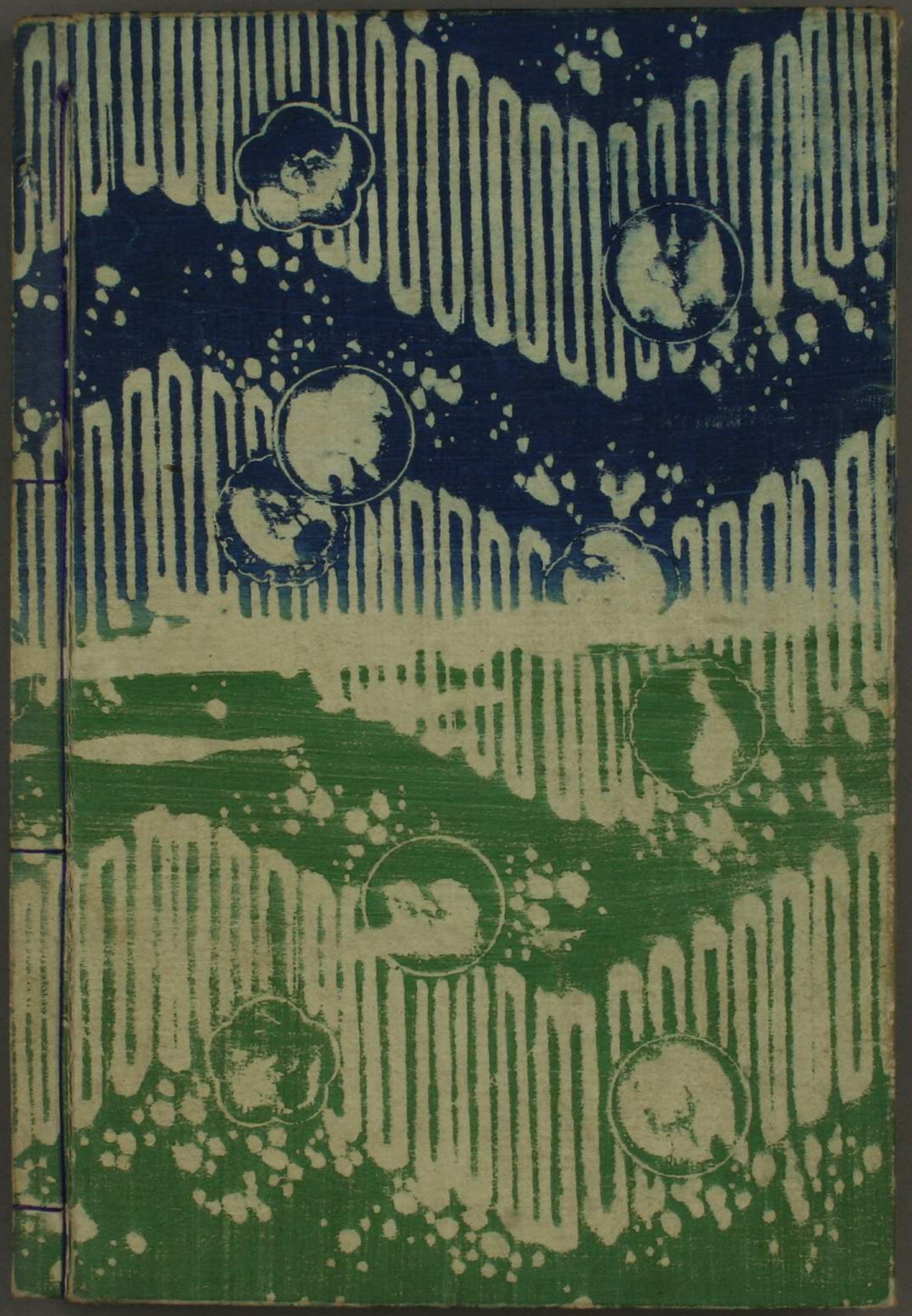
土丈二

次團太
をこせ
鄙三が越路の物かたり
次團太夜なん妖淫を捉ふ

便りと求めば資助あるとあるべしと教ゆと他吏もあく問ぜざるふ身の憂苦と霽せど晴れぬ鬱陶しい真実ある田舎児の仁は庶く原木訥は剛毅もて人々良れる坐敷師へたべと聞く憶也嗟嘆しく。そも胸苦しくなる郷高中三ヽ様せ如く面部の嘗の吉凶を心術の好ずなるもあるぞ外の老実なるは優てその乾父孝順なる誠と神も憐をのこく願ひを遂させのべ然どく某も五十子の城の由縁もあねどるを又攻まるらもべと答る詞の訖らぬ折ふ村長荘客五六名割竹を引揚鳴ゝて遽しけふ走り来る。忽地ふ声と被けてやよ盈賈人然しとかをれも扇谷の名上さまの目今當社へ来せるべ快天莫奈と掬合ふ下ヽ左の巨刀も鎌鎌も快々外へ出ぬ。這頭ふ土居て名下向の後ふ亦復賣買とあるその程まで人を聚合て立もべくも那々遥ふ名轎子ハ人えさせのふ快せぞやと遽ヽ立る村長ハ荘客們を従て餘の賈人を制めんとそ社のかゝへ走りけり。ぬいろけ北条貴人の社参ふ坐敷師いちも措れぞ。も引下き天幕ふ鎌さ大刀と巻敛て例のごく門番屋へ西妻時凭そ措んぞと肩ふ載せてもるれ餘る賣茶箱ふ高足駝踏蜘蛛も木枕も廻り難ふ揚竹目面と抓む遽しもと倶ふ慌る鄙者見過しどくふ偽ふて運び果せど真く胸ふ決治抜けの時宜名轎子ふ偏はゝく愁訴を受え上べ狡不已空寸西妻時不覚ふ然しと不敬の外ふ遺べ命ハ其首ふ終るべし。左あそやうけん右ふ狡と哭不樂ハ怖ふのそうとハけ世の鄙語ふ漏る反樹蔭ふ身と寄れば坐敷師ハ舗棚の迹ふ土居て轎子の行過る間とちふけり。介程ふ管領扇谷定正の内室鮮虫目上ハ近属持資入道の造営ある湯嶋の神社へ詣んとく。昨日よりその準備あり。時ふ文明十五年の春正月廿日の巳牌ふ五十子の城より路次の仏粧。許ヨメの士卒侍女醫師。後ふ後ハ先ふ立ち外珍ゝ春の野の草も萠葱の茎雉刀袋ふ挑て憑ひ神社の朱の玉垣緋の油簟色さへ對の夾箱子ふ大路陝ゝと徐ゝたる。麻生ふ来て白金ふ沸き湯嶋の茶辨當被衣ハ女孺伴轎子の先ふ醫羽の仏折傘の折目正き武家風俗も光

和く春の日ホ八重と一重とあらそはまし。梅ホも優る初花と目を驚き青人草の処々ホついねて
を齊一かとを目送りける。偖而鮮虫目上の轎子の湯嶋の社頭ヨ来さけれバ。社僧或名歌
出迎へく。案内ホ立んとする折鮮虫目上の日屬より寵愛深紀雛猴ホ。這日も轎子ホ
容さそ。勝の上ヨ措れる。這猴猛可ヨ岡極驍ぶて。走り出すく欲せ。ヶ所ホ尿ホ。ヶ所せく
ほ。ゆ出んとすれども。ヶ所出て浄ヨと致さよと。仰せるとヶ所の轎隷の老侍某甲ホて
程ホ絆の紐ヨ緩をけん。猴ホ忽地閃りと放れく。社頭ホ老る銀杏ホ梢ヨ走り登りて嘆
べども降らぎ主ホ。ヶ所ヶ。伴當の老弱男女慌迷ひて捉捕へんと欲せれども樹ヘ百繪と歴ヶ
け。杪ホ雲ヨ凌ぐ。ヶ所ヶ。枝敏く皮さへ黒ヨ十囲ヨと餘る幹ホ足ヨ撫ぶる処なし。
天飛ぶ鳥ホあらざりせば那里ホ到り易ヶ。是故ヨ鮮虫目上ホ轎子ヨ駐させて。便直ある。
と問ひ。ヶ大家頭ヨ病ヨ。忙然ヨ七計の。ヶ所ヨ知ざりけ。左右ヨ程ホ猴ヨ

杪ヨ彼此と木伝ホ枝ホ絆の紐の幾里ともなく。勝れて果ホ短ヶ。是ホ猴ヨ
駭慌て引拔んとせ。程ホ倒ヨ身ヨ引締られて苦む。甚く。精竭け衰へて。絶
も果ぶる形勢ヨ。鮮虫目上ホ轎の内ヨ。逢ヨ商く。那ホ。ヶ所ヶ。不便ヨ今那猴ヨ
速ホ助命ヨ。ヶ所ヶ。賞祿ホ。ヶ所ヶ。依ぶる。ヶ所ヶ。尋て。ヶ所ヶ。仰せれども。曾般ヨ雲の梯ヨ
借るるのホあらざれば。企及ぶべもあらぬ。主従齊一氣ヨ岡く。社僧ホ商談ヨつれども。
行童ホ愛護孺るければ。猴ホ。ヶ所ヶ。皆疎鹵ヨ。辭敬ホ。ヶ所ヶ。俱ヨ樹杪ヨ
向上て。ヶ所ヶ。折ヨでも舗棚の迹ホ土居て。痿痺ヨ。坐轂ヨ師ホ人々ヨ智ヨ。
拔ヨ。ヶ所ヶ。傷ホ痛ければ。憶ヨ。ヶ所ヶ。夫ホ。ヶ所ヶ。這伴立の頭人なりけ。扇谷奥隷の
老當ホ。河鯉權佐守如と。ヶ所ヶ。做ヨ。ヶ所ヶ。不敬ヨ。ヶ所ヶ。怒る。ヶ所ヶ。汝ホ
怎生ヨ。ヶ所ヶ。上の御寵愛の雛猴放れて。俺們ヨ。ヶ所ヶ。周章ヨ。ヶ所ヶ。汝ホ獨ホ許ヨ
狡不敬の挙動言語同断。その情由稟せのいぎ。と敦圉暴く。ヶ所ヶ。坐轂ヨ師ヨ。此ヨ

謀ぜ。守如はうち對ひて。不在下ハ這処にて。坐皺る鏁鎌の技をもて生活の資にする薬賣人で候が上の言せられよう。權且舗棚を合して飲めて。地所を成して候程に方便ほ憶きも笑ひしハ是刀祢们を挾せしなれ。畜生なりとも那猻猴が。猻猴智慧もなく技もなく。氣をのみ悩て死を俟ぐるとぞあなくて堪がり。野夫ゆえ功者なりとあらバ。尚在下ホ命せらるるハ。猻猴を助けて下さい。とらす守如怒を轉して。猻が大くなるハ憶ぎも額を捐て。それ一段のなえか。快かん猻猴を合て人よか。賞禄ハ乞ホ依るべけれど。遽されても坐皺る師ハ。応をする左右なく。逍遥ホ秒をとち向上て。那亦肉世根柢より。二大あまりハ枝もなし。然るをも段を旋して。縦秒ホ到るとも。踏外しなバ這世の別れ。活業なる功名の樹登りを。もし術心あらバ後悔甚ハ首ホ立かて。君於思ホも身の為なれバ。在下も亦願ひあり。這義を許させ給ひね。と問復しつ。權勢ホ憚る氣色なかりけり。畢竟又坐皺る師が。甚麼するかとらひ出せるぞ。そは次の巻ホ解分なるを聴稀かし。

里見八犬傳第八輯巻之七終